特116
670

博洋著

博洋叢書第一輯

應用自在觀相學正義

始

泰都

觀劫

松園主人題

特116
670

序

黴毒のある小兒の頭が方形であつたり、口唇に線狀の瘢痕を留め、子宮を病める婦人の眼の周圍が黑褐色を呈したりすると同しく、心に病めるものは必らず顏貌に其兆候を呈するものである、丁度「舌は胃の鏡なり」と云ふ如く、顏貌は心の鏡である、即ち相を觀て其個性を知り、從て人の將來をトし、過去を判斷するのが此學問で、今は科學的立脚したる立派なる學問である。

茲に一日余が院の一室、泰然と椅子に倚り、患者の疾病を指摘し、患者の運命を縱橫に論談して盡くる所なき、豊頰美髯の一偉人がある、之れ即ち小幡博洋君である、同君幼にして穎敏長するに及んで、益々聰明、頭腦の餘猶は一業に甘んすることか出來す、窃かに觀相の學を究め、細に亘り、微を穿ち、過去の事實を指示し、將來の運命を豫言して百發百中、何人と雖も同君の言を否定することの出來ない程左樣に斯界に於

大正15.4.13

けるオーソリチーである、今其蘊蓄の一端を公にせられたが、其說く所、簡にして明、しかも其要点を捉へて漏さない、此學に志す者には以て適切なる參考書となり、一般人士には以て自分の將來を開拓する指針ともなるべき良書である、即ち序して諸君に薦むる所以である。

大正十三年

於香樹園

仁科杏齊

自序

我が觀相學は東洋流の神秘的氣色を經とし、西洋流の科學的骨相を緯とし、兩者相俟つて檢査考覈、毫も間然するなき實驗心理學である。

彼の九星や干支、又は周易姓名判斷と趣きを異にし、各個性に就いて其の顏面を觀取し、宿命の由來する所以を辨まへ、之れに處すべき自智啓發を考ふるものである。

從來の心理學は机上のセオリーにして、其の結論は常に一般的に陷るも、我が心理哲學は個性に基く實驗なるが故に、千差萬別、各人各樣、其の容貌の異る如く其の心性運命をも異にするものである。

之れ學者の興趣を惹いて今や一般に智識階級に認められ、既に實用の域に達したるも、猶ほ一部の人々に誤解せられて八卦と混同し、或は荒唐無稽の妄誕と嘲笑せらるゝを遺憾とし、爰に觀相唱導を提示して斯學の宣傳に資することゝした。

素より眇たる一小冊子を以て、深遠縹渺たる斯學の眞髓を盡すべくもあらず、況んや吾人の蕪辞にして其の說くところは九牛の一毛だにも若かざるが。幸に之れに依つて幾分觀相の妙諦を會得せられんには、吾人の唱導即ち意義透了したものである。若し唱中の質疑に關しては吾人は快然として應酬を誓ひ、更に進んで研究せんと欲する篤學者には、吾人菲才と雖も敢て敎導の任に當ることを辞せざるものである。

大正甲子孟春

小幡博洋誌

觀相小史

觀相學を說くに當り運命觀史の概畧を述ふることが必要である。

冷靜なる科學に立脚して運命なる語を考察する時、世に之れほど不可解なものはあるまい。アダーム、クラークは「偶然又は不可思議と云ふことは科學の至らざる、人間無智の囈語に外ならぬ」と喝破したが、其の人間無智な現今に於いて運命なる語を以てするより外に說くべき適當なる文字も言葉もなきを如何にかせん。

宇宙は必然の理法を以て支配せられ、人間は自由の意志を以て行動するとは云ふものゝ、靜かに天地の意匠を察し、人間の情趣を考へ見る時、我等は自然の偉大なるに驚嘆し、人事の錯雜に惑乱を兎るゝことは出來ぬ。

五十年間、不斷の努力を以て建設したる我が大帝都は、自然が示す威力の前には一とたまりもなく、天公一譴の下に灰燼に歸したのである。

而して之れに纏はる諸種の悲愁哀憐、思ひを今次の大慘害に致せば、人生の凡ては實に春

宵一夢の儚なきを覺えねばならぬ。

十九世紀以來、科學の進歩は駸々として發達し、就中蒸氣と電氣に甚たしきものがある、ために巍々たる峻嶺も低きに至らしめ、縹眇たる大洋も狹きを感ぜしめた、然かも限りもなき自然の大に臨んでは、限りある人智の何として其の謎が解かれやう。

況んや太古朦昧の民にして、荒寥たる原野に綺羅たる星辰を仰き見る時、彼等の心理に天象の凡てが何等かの警異に値ひせねばならぬ。

省みて人事の死生窮達、存亡興敗に思ひを致せば、天体の運行が人生と相應して、そこに何者かの威力と暗示を感知せさるを得ないのである。

寂莫たるアラビヤの野に、戀を囁く青春の身にも、光芒一過流星の閃めきは異常な恐怖であつたらう。

天然崇拜は斯くて何れの國に於いても、最も權威ある信仰となつて、日月星辰を神の權化とし、神は自然の現象に依つて、凡てを豫告し警告するものと思惟したのである。

支那に於いては、天、象を垂れて吉凶を見はす、と謂ひ、或は、國家爲に起る禎祥あり、

國家爲に亡ぶ妖孽あり、などゝ說いて居る。

之れを西に求めて亞剌比亞の占星術(アストロロジー)が最も盛んで、今に相等の勢力を保ち、識者の間にも侮り難き威力を示して居る。

此の占星術は天体の十二宮を、生活、富貴、兄弟、親戚、子女、健康、結婚、生死、宗教官祿、交際、仇敵、等に配して極めて巧妙なる星宿判定をなしたものである。

之れを支那の九星干支に比して優るとも、劣ることはないが我が國の因習久しき、今に於いて猶ほ且つ九星干支が一大勢力を把持して居る。

希臘にてはヱリンニヱスなる宿命神を奉じて、人間の運命に絶大なる支配權を認め、羅馬にてはオーギウリーと云ふ占術があつて、羅馬人の凡てを支配行使するものとして居る。

而して凡ての示現が神の聖坐たる深林幽谷に求めたことも面白く、我が國に於いても清淨高遠の地をトして神社が建てられた、彼のオリンポス山上の殿堂に神の聖示を仰いだことも、之れに因するものであらう。

人間無智なる時代に處して天体崇拜は、頓がて神の顯現を占ふことゝなつて、彼の希臘の

英雄アガメンノンの如きも、尼僧ビユチアの前に拜脱してトロイの戰ひを占はしめたことは有名なる史實である。

イスラエルの昔に於いても神に接し得る者を、特權階級の豫言者と崇めて、一國の政治に容喙せしむるが如きは尋常茶飯事であつた、現に豫言者サムエルが、サムルなる者を擧げて國王に推戴したり、豫言者アビヤーはイスラエル國の分散を告知したり、實に豫言者の一言一句は非常な力があつた、

古代アッシリヤの王國に身は一婦人にして夫を殺し、其の國王を弑して遂に大權を掌握した、女豪セミウミスは埃及や其の頃世界の最端と云はれた、エシオヒヤを征服し更に大軍を裁して印度に遠征と試みた程の豪の者だが、ジユピターの神托には潔よく王位を讓つたものである。

古代バビロニヤの風俗にして男女間の事も、神の示現に委ねたもので、彼等の處女は沐浴齋戒してヴ井ナスの神廟に神と交はつて其の貞操を献じたと云ふが、甚た以て不都合な神と云はねばならぬ。

かくて夜毎に通ふ處女の群にも美醜はあつて、神は常に其の美はしきを選定したとか、愈々以て神の正体現はれにけりだ、豫言者の勢力斯くの如きは印度に於いても、婆羅門の貴族ぶりが今に災ひせられて、其の國既に亡びて仕舞つたが、猶ほ憑りずに今も處女の貞操を名ある坊主に疎躙させて怪しまない。

刃に衂らずしてメヂヤ國王となつた、ダイオシスも神托に言寄せ、其の子のアスタイジスが王孫を殺さんとしたるも神托、又それを助けたハルパガスも神托、助けられて後に豪勇無比、世を擧げて戰慄恐怖せしめた大王サイラスも、事毎に神托に寄つたもので、其の最後は悲しくも亦神托に謀られて恨みを呑んだ。

印度に於いては釋尊降誕に際し、五百の相者を召したとあるから、既に此の時代に觀相の術が相等に行はれて居たことが想像される。

佛敎が因果律を示し、基督が天啓を說き、回々敎が宿命を叫んだが、それらは多く未來に屬したる慰安であつて、現在とは聊か隔絶して居るので、爰に哲學は其形を變えて豫言となり、警告となつて善導に努めた。

伏犧の八卦は周公文王を經て、孔子の十翼となり、佛敎の宿曜經となり、何圖洛書は干支九星五行となつて今に吾人の迷信を支配して居る。

我が國にても、天香山の眞牡鹿の肩をうち拔きて、其の割るゝ形狀により神意を占ふたことは、エトルリヤ人の動物を割く占法と似て慘忍性を帶びたものである、又三韓征伐の後、百濟より齎らした龜卜と云ふは、龜の甲を灼いて神意を見るので、現に宮中に繼承されて行はれて居るとか。

支那及び印度の天明か渡來すると共に、運命觀は愈々精髓を極めて陰陽道の勃興著しきを呈した、宇多天皇の朝に賀茂忠行と云ふものが、陰陽推理に長じ吉凶善惡を明斷した、而して其の子保憲に到つて遂に宮中に陰陽頭を置かれた程である。

彼の有名な安部の晴明の如きも其の門より出た俊才で、大日本史に、「安部晴明は天文博士で占術に通じ、奇中神のやうだ」とあるに見ても思ひ半ばに過ぎやう、其他、寶占、米占、石占、夕占、辻占の類は限りもなく、平安朝より、源平時代、戰國時代と愈々益々殷賑を極めたものである。

かくて久しく宗敎や哲學と混淆して、其の選を別にせさりし觀相術も支那に在りては、神相全編の如き權威ある成書に依つて、自ら八卦九星干支宗敎と別異なるを証し、西洋に於いてはラバートルの相貌學斷片の如き名著によつて、其の妄想の迷論ならさるを示して、遂に今日の隆昌なる科學課中の一階段となつたのである。

觀相原則

觀相學には大体に就いて左記の四原則がある、

(一) 心身は一致す、
(二) 身形は比例す、
(三) 心身は變化す、
(四) 特種なる發達、

顔は心の物質化、体の代表彰、

第一の心身一致は古くより謂はれて居ることで、アリストートルの如きも既にして之れを主唱して居た、吾人は顔の通りの心で、心の通りの顔である、心正しければ其の顔も正しく心不正なれば其の顔も不正である、彼の顔に似合はぬ心と云ふは、未だ觀相の堂に入らさる皮相の見であつて、佛敎の外面如菩薩、內心如夜叉であらねばならぬ。

眞實は外面如菩薩內心如菩薩、外面如夜叉內心如夜叉で、內心如夜刃と云ふは單に譬喩に過きぬので、彼の聲で蜥蜴喰ふかや時鳥、優美な音聲の持ち主が心に毒を抱いて居ることを諷したもの

であるが、杜鵑裂帛の一聲は何人と雖も慄然たらざるを得ない、況んや如夜叉毒惡の妲妃は、獨り紂王非義非道に於いてのみ喜ばれるをや、虫も殺さぬ顔の女が何とて男を殺さうぞ、高橋お傳も花井お梅も、將た又山田憲も皆夫々に人を殺すべき、心身一致の爭はれないものがあつた。

吾人は生れなからにして直覺的に觀相の能力を有するも、人情の弱点として感情に支配せられ、遂に其の能力を發揮するが困難となるのである、されば冷靜に感情に走らず、沈着に對者の顔面を觀取する時、其の心性の凡てに渉りて歷々指掌に求むることが出來る。

第二の身形比例は他動物に比して頗る優秀なるものがある、身体を等分するに股の附け振を以てし、十進法の測定は頭部より規準を正して足部に及んで居る。

又吾人の左右両手首の和が頸首と一致し、頸周と面部の和が腦周に一致し、腦周と頸周の和が胸圍に相等しいのである。

今此の比例に依つて各人の身体の强弱を考察し、其の生命の長短をも測定することが出來る、則ち比例の正順反逆に鑑みて、生物發育の限度を基調に加減すれば、明白に其の天壽

を算定することゝなるが、それには微分、積分の高等數學を要するので稍く煩はしいものがある。（變死病死は自ら別に見る法がある）

吾人が身形の比例を著しく缺くことに於いて、斷じて其の生存を許されない、而して此の身形比例は一目瞭然たるもので、一本のテープを以てして容易に測定し得るのである。

第三の心身は變化することも否定されない、昨の善人必らずしも今日の善人ならず、今日の惡人必らずしも明日の惡人ではない、吾人が何等かの動機に於いて負傷したる時は、既にして局所の變化を來し、其の度の大小輕重に依つて心性に影響することも、自ら大小輕重あるものである。

若し吾人が重患に臥し困憊痛苦甚しき時、其の心氣頓みに衰いて懊々たるは蓋し當然であらう、更に又心に煩悶を抱き憂愁甚たしき時、何人か其の身の快活なるを誇り得やう。

吾人の心身が變化せさるものとせば、過去現在未來を通じて何等の發達進化なき、下等動物と何の撰ふところがあらう、吾人の心身は實に此の變化によて、人類たるの意義あることを思はねばならぬ。

若し夫れ殺那の衝動にも心身の變化あるは、ユーゴーの哀史に於ける、ジャンバルジャンに徵しても首肯されやう。

第四の特種發達は其遺傳なると、環境とに依るを論せず、凡ての特種發達を謂ふのである。

亞布利加土人の婦人に見るが如き鐘囊狀の乳房や、ホッテントット婦人の前垂れの如き陰唇は遺傳による特種發達で、脚夫の足の發達や、農夫の手首、鍛治職の指掌、力士の耳、劍士の手腕等は環境に基く特種な發達であらう、かゝる特種なる發達に於いても前三ケ條の原則は、一として外れるものではない、則ち特種に基く特種なる心身の一致を認めねばならぬ、只だ第二條の身形比例にのみに若干の例外を來すことゝなるは是非もない。

而して之れを心性の特種發達としては、彼の變態心理や二重人格や、狂人の類を謂ふので、此の場合には身形比例に著しく逆行することはないのである。

以上四原則を別にして猶ほ番外とも謂ふべき、重要なる一ケ條を閑却することは出來ぬ、それは、

（顏面には一点糸毫の瘢痕黑痣汚濁を許さざる）

ことである、吾人の顔面は常に清淨潔白であらねばならぬ、既にして心身一致の理を會得せば、其の顔面の瘢痕黑痣汚濁が、必らずや心性に關連あることを悟るべきである、要は其の顔面表彰の大小深淺に依つて、心性に及ぼす程度に差異を來すことゝなるのである、之れを嚴格に謂へば吾人の面部に墨の如きを塗るも、猶ほ且つ心性と運命に若干の影響を及ぼすものである、若し吾人が吾人の額部又は鼻潔に墨を塗布して、極めて莊重なる儀禮の席に臨むとせば、如何なる結果を招くであらうか、敎壇に立つ敎師の顔に赤インキを色彩せば、敎へ兒は如何なる感想を抱こと、か、其の敎授は蓋し滑稽失敗に終るは當然であらう。以上の原則を辨まへて然る後に觀相の實驗に移らねばならぬ。

両性の甄別

（左右面及年齢）

天地萬物凡て之れ陰陽両性の結合より生ずるものである、吾人も男は陽性にして剛健篤實なることを要し、女は陰性にして柔和優美なるを尊ぶものである。

故に男性は氣骨稜々として、强壯の風格自ら髮膚鬚髯に現はれ、言語動作明快活達なることを要とし、女性は容止端麗、貞淑の氣品自ら備はりて、一笑一聲苟もせざることを喜ぶものである。

然るに男性にして一見女性の如く、或は女性にして男性に類するは、凶惡の相として甚だ忌み嫌ふもので、かくの如きは男は柔弱に失して何等なすなく、女は偏狂に傾きて自ら世を呪ふ者である。

總じて男子は筋骨的なることを尊重し、女子は營養的なるを可とするものである。

今吾人は此男女両性に依つて生るるが故に、吾人の体質には男女両性の遺傳を認ぬ譯には往かぬ、而して此の両性の遺傳は吾人の身体の左右に、分割して明白に現はるゝものであ

る。

則ち男性に於いては左身を父系とし、右身を母系とするので、女性に在りては其の反對となる、之れを原則第二條に照して顔面のみを以て檢する時は、左面を父とし右面を母とし其の比較的發達したる部分を遺傳に勝るものとせねばならぬ。

例へば男子の右面に發達優秀なるは、母方により多く似たものとなし、其の反對に左面の勝れたるは父に似たものとする、女子に於いて右面の張るは父方に似て、左面に優なるは母系に負ふ所が多いことゝなる。

而して此の左右面は稍や均分したるを佳とし、其の著しく相異する者は性格運命共に偏執なるを免れない、彼の夫婦の親和を缺ぎた者や、年齢に多くの懸隔ある者の子には、此の左右面に最も甚だしき不等格を表はすものである。

左右面を檢したる後に順序として、一應年齢を調べる必要がある、吾人は動植物と異り智識を有するが故に、年齢の如き各人一樣に見ることは出來ない、等しく之れ明治元年生れの人なるも、一は極めて平凡な生活に何の苦もなく過した者と、一は波瀾重疊の生活に懊

惱を事とした者とは、其の容貌に於いて大なる老若を來すことゝなるのである。

故に吾人の年齢は彼の馬齢を加へるが如き平凡ならざる限りは、植物の林相と同一に論ずることは不可能である、けれども既にして相等しき月日を經過した点に於いて、其の相等しき年齢は共に相等しく見ゆることを佳とせねばならぬ、彼の若くして老人の如きも非なれば、老体にして壯者を凌ぐが如きも不可と斷すべきである、則ち一は其の年にあらずして老衰の由來を認め、他は其の年に當らざる凡庸愚鈍の身と謂はれやう。

若し之れを身形比例に徵して、年少者の白髮は必らずや何等かの不幸を釀し、變死薄倖短命等の悲しみを見ねばならぬ、而して老いて益々鑠鑠たるは可なりと雖も、孫子の手前も憚らず異性に狂ふが如きは以ての外である、然らざれば老來辛苦止まざるものがあらう。されば吾人の年齢は其の年數に添ふて、三十歳なれば三十前後に、五十歳は五十前後に見えて、餘り懸け隔てなきを喜はねばならぬ。

三　形質

從來の形質區分法はヒホクラタスの四形質に基いて、神經質、多血質、膽汁質、琳巴質に別けて居るが、此の區分法は病理的にして且つ解剖的なるが故に、吾人は生理的に將た心理的に區分することを考へねばならぬ、そして三形質區分法が最も簡易であつて、それが合理的であることを認めたのである。

吾人の身体は營養素と筋骨素と神經素より形成されて居る、吾人の身体より營養素たる肉を除けば筋骨素と神經素となる、而して更に此の筋骨素を除けば餘すは神經素のみとなるのである。

此の三素質を吾人の身体に徵すれば、腹部は内臓の凡てが營養機關なるが故に、腹部の比較的肥滿せる者は營養質と見ねばならぬ、胸部は外面に肋骨の如きを以て圍み、其内部も勇氣活動に因をなすが故に、筋骨質の表彰と見るべきである、而して腦髓は神經を包有するが故に、腦の過大なるは神經質に優れるものとなる。

然れども吾人は猥りに他の内体を比較研究することは出來ない、よしや對者に依つて許さるゝとも、夫れは嚴に遠慮せねばならぬとである。於此乎、身形比例の原則は直ちに應用せられて其の顏面のみに就いて三形質を檢することが出來るのである。

それは吾人の顏面を圖の如く三分し、其の上部を神經質、中部を筋骨質、下部を營養質とに別つことである、上部は腦髓の表彰で神經素たるは云ふまでもなく、中部は顴骨、鼻染等に依つて形成せられ、下部は青春肉に旺んなる時は豊頰垂るゝか如き感あるも、老衰して氣色共に減退せば著しく削殺するに徵しても、營養素質の表彰たるを知ることが出來る。

されば西洋にては上部を以て智識の發露とし、此の部の濶きは智識豊かなるを賞し、其の狹溢なるは智力に乏しきを憂ひて居る、中部の濶達豪宕なるは意力の旺盛なるものとし、其の軟柔なるは意志薄弱なるを歎き、而して下部の豊頰は愛情の圓滿を示し、其の削殺缺陷したるを冷淡無情と憾んで居る。

之れを東洋流に辨まへて、上部は初年の運を司り、中部は中年の運を支配し、下部は晩年の運を左右するものとして居るが、東西共に其の揆を一にして居ることも面白い。

何となれば初年運勢佳なるが故に智識を修養することも出來、運勢不良なれば從つて修養も怠る譯である、中年元氣旺盛なれば運命も佳良なるが、若し意力劣ひて發奮努力を缺けは、從つて運命に不可なるは云ふまでもない、晩年運氣に般賑を極めなば、愛情も至然に美はしく、兒孫を擁して和樂洋々たるべきも、若し貧困に處して如何で、愛情の圓滿濃厚なることが出來やう、路傍時に惻陰に堪へさることあるも、省みて懷中乏しきと思へば何とて他を惠む餘裕があらう。

之れ三部に於ける三質三運の其の名稱を異にするとも、東西共に相等しき見地に立つもので、觀相の妙機甚だ奇なるを知らねはならぬ。

普通の四形質區分に於ける神經質は、ヒステリー、ヒポコンデリー等を意味するも、我が神經質は感情性センチメンタルを謂ふので、彼の病理的ならさることを証明すべく、神經質に代へるに心性質なる言葉を以てすることゝ定めた。

而して此の三素質の程よく均分したるは、其の身体も强健優秀にして、容貌自ら莊重端嚴なるも、其の何れかに偏する者は身体も容貌も偏倚なものである。

營養質に過ぎたる者は氣骨に缺く所あるも、能く忍耐持久し陰柔以て自らを壓へ、怠惰なるも事に當りて熱心なるか故に他の頭梁たる雅量がある、實業家には最も適當して居ることは、澁澤子爵、大倉男爵、淺野氏等に見て自ら首肯されやう、又親分系の典型たる大山元帥に辨まへて、營養質の善良にして修養ある者は必らず、其の身分に應じて他の宰領となることが出來る、之れを國に考へて彼の猶太人が其國亡びて山河空しく、行くとして侮辱を受けて居るが、陰忍自重今や世界の富豪として、財界に蔚然たる一大勢力をなして居る。

筋骨は勇氣を表示して自發的である、營養質が內面的にして受働性なれは、之れは外面的にして發働性である、彼れは女性の柔弱なるに比して、之れは男性の剛健であらねばならぬ、營養質が親分系にして坐談的、職掌に適せりとせば、之れは運動系にして勞作的職業に適するものである、則ち筋骨は威嚇で、勇猛で、進取で、軍人系、司法官憲――但し日本國

の――海外發展を意味して居る故にかゝる素質に勝ぐれたる者は、其の分に應じて夫々の男性的職業に就くべきである、之れを國に譬ひて羅馬の昔に稽へるに、武斷侵畧戰爭を事として勇壯なるものがある。

心性質は學者系、參謀系、藝術、詩歌、音樂に可能性がある、人に於いてはシルレル、バイロン、アービング、李白等國に求めて古代希臘に徵すべきか、絢爛の美世に比ひなき希臘の美術は、今に吾人の憧憬に堪へぬものがある。

之れを要するに營養質に過きたるは親分を以て自任し、實業界財界の人たるべく、筋骨質に秀てたるは威嚴を以て人に臨み、其の身分に應じて或は軍人に司法官に勞働に從事すべく心性質に優れたるは參謀家を以て立つか、或は文藝美術に志して成果を致すものである。

さもあれ吾人の修養は自ら第二の天性を作りて、營養質も軍人司法官たるべく、筋骨質も文藝詩歌に赴くことは困難でない。

上部前額の歪みたる者は其の両親に歸納して、必らず不良なるを証することゝなり、本人の姓格も從つて不善を藏し、其の智識にも決して優秀なるを持たない、若し額部狹溢にして削殺甚だしきは、必らす獰猛粗野なる獸性を帶びて居る、中部歎骨の著しく突起せるは暴虎憑河の勇に隼り保守の分を辨まへぬ猪突漢である、下部顎頤の殊に過大にして見苦しく膨張せるは、肉情旺盛を極め品性卑劣、然かも自ら恬として恥ぢなき者である。

若し額削殺し歡骨脊の如きは必らず殺伐の氣風がある、平常温和の態を裝ふも一朝怒りをなす時は、世にも怖るべき蠻行を敢てすることを忘れてはならぬ、更に又前額見苦しく狹き者の下部顎頤に膨大なるは、性慾に基く獸行を犯し、其の腮骨の一方に歪む者は制節度なく、平然として野獸の態を發する者である、世間往々前額歪み、下部に偏し顎骨の醜惡なるを見るが、かゝる輩は婦女を姦し妾女を虐げ、時と場所に論なく乱倫非行を遂げやうとする惡魔である、よしやフロックコートに儀容を正すとも、そは沐猴にして冠する者で寔に嗤笑に堪へさる業である。

それが先天的のものであらうと、或は顏面神經痛の如きに基く後天的なるとに論なく、面部の不正偏倚は斷じて許すべきではない。けれども自智啓發の能力に依つて、修養怠らざる者は天性の粗暴獸行を制して、其の品格を向上せしむることゝなるが、かゝる思慮分別

營養質

筋骨質

心性質

ある者は先づ万に一人もあるまい、彼の一國の議政壇上で暴力を振ひ、或は身荷も教職を借して、宿舍の女中を誘拐する狡兒は、常にかゝる顏面の持ち主であることを思はねばならぬ。

記して玆に到れば吾人は今更ながら、心身一致の理法に悚然たらさるを得ないのである。

之れを動物に徵して彼の營養系の代表とも見るべき豚の如きは、能く喰ひ能く呑み能く生み、獅子の如き虎の如きは威容堂々、獅子吼爲めに百獸戰悚し、猛虎一聲山月高きを覺える、而して神經質の馬や羊や鹿の類は柔順温和愛すべきものがある。

若し夫れ巨象の營養質にして、泰山崩るゝも大河決するも悠然自若たるに至りては、吾人大に學ふべきものがある、之れを小猿の小ざかしきに見て、吾人は大人物の出現を望み俟つこと、實に旱魃に雲霓も啻ならざるも、憾むらくは豕象溷沌として常に東洋式驚的の豪傑に膽を冷やすことである。

今、平家の公達を神經質になぞらひて、鎌倉武士を筋骨質となすべきか、而して營養質のタイプを何處に求めやう。

茲に五官と云ふは、耳、眉、眼、鼻、口の五個を指したものである、吾人は動物進化の原則に基いて、先づ口より說くことを順序となすも、耳が吾人に取つて最も重要なる位置を占むるが故に、耳を以て五官の說を起すことゝした。

耳、

耳を原始的に辨まへて音響を聽く機能に過ぎないのである、自衛警戒の用具として運動安全の規矩として、耳は不斷の注意警護に任じたものである、されば吾人の耳は此の用能に便ならしむべく、軟骨と筋肉とに依つて形成せられて居る、而して耳上筋耳前筋、耳後筋等の七筋肉は耳朶を前後左右に圓轉滑達ならしめて、苟も警戒に粗漏なきやう造られてあるが、既に野生の時代に遠ざかることに於いて、吾人の耳は其の警戒を單なる音響にのみ依る譯には往かぬ、寧ろ耳の固定に俟つて思想の統一安定を計ることが必要となつた。

則ち人類進化の第四層期頃より、耳は其の外的運動を次第に停止して、內面的充實に努めたのである、動物に於いても猿の如きは稍や其の運動を阻み、猩々の類に至りては、殆んと靜止の狀態である。而かも之れを解剖に附する時は他動物と等しく、運動筋肉は依然として具備して居るのである。

吾人の耳は其の運動を停止すると共に、智識の發達は著しき進步を促がした、原始的に於いては感じ得る本能にのみ衝動した者も、次第に考へ得る智能を增進せしめて、遂に今日の優越なる地位に到達することゝなつたのである。

されば吾人の耳の用能は既にして天性を脫したもので、全々理智に活くるものと謂ふも何等憚りはなからうと思ふ、故に其の耳朶は吾人の意志と交涉を斷絕して、輪廓形狀は凡て之れ宿命の儘なるものである、何となれば吾人は如何に自由意志を以て耳の運動を欲するも、耳は超然として意志の外に聳え立ち關せず焉と濟まして居る、之れやがて、汝本來の宿命は耳にある、と云ふラバートル一派の名言となつて、吾人に天來の暗示を與へて、審さに宿命の由緣を輪廓と形狀に鏤刻したものである。

之れ實に人間性の最も愉快なる表徵であらねばならぬ、則ち吾人は宿命を耳に鑑みて、自

智啓發を顔面四官の運動に依るべきである。

顔面太陽素が精神的安定を保つが如く、耳は肉体的静止を計るものである、則ち耳内の蝸牛殼に添ふ三半規管が其の用能を表はすことゝなる。

三半規管と云ふは耳の奥に三つの半圓形のものがあつて、各々小粒塊と九十の纖毛質を有し水分を貯へて居る、吾人が運動に伴ふて傾斜し其の角度の危險狀態にあるを知るは、實に此の三半規管の感能である、彼の兒童が盛んに回轉運動を試みて、最後にバッタリ倒るゝは此の規管の混乱に依るものである、又有名なる劍士の仕合に於いて両者共に、動かず乱れず青眼に構えて微塵の搖ぎもなく、其の不動の姿勢は實に顔面太陽素と此の規管の一致に依るもので、而かも時あつて両者共に昏倒するは、相等しき伯仲の伎倆と斷じ其の何れかの倒るゝは則ち心身一致の勢力に劣るが故である、其他船車の眩暈、酔餘の蹣跚等凡て之れ精神安定と肉体静止の一致点を缺くことゝに依らねばならぬ。

かゝる五官の心理的解說は、博洋叢書第二輯の心理哲學に於いて詳述する筈である。

然らば如何なる形狀位置に於いて耳の良否を判すべきか一應考査の心要を感じて來た。

既にして動くことを要せさる吾人の耳は、其の形質に於いては硬きを尊ぶものである、筋肉强堅にして豊厚なるを貴とせねばならぬ、彼の動物の如く軟弱にして輕薄なるは、心性野卑にして宿命にも亦甚だ不可なるものがある。

耳の形狀は心性機能と一致するもので、又原則に依つて身形とも比例せねばならぬ、耳の上輪比較的大なるは心性質を表はし、中輪强頑なるは筋骨質を示し、下輪珠を垂るゝ如く豊滿なるは營養質である、故に天輪より下輪に至るまで、三形質の調和均分を得て强硬且つ豊滿なるを佳とするものである。

耳は其の外面的には宿命の儘なるか故に、未た自智啓發に乏しき兒童の性格運命は、耳を以て檢するを便とし又成人に於ける幼年の運命も、此の理に依つて耳を檢するが至當であらう。

吾人の顔面は其の成育發達に連れて變化するも、獨り耳のみは依然として舊態を維持して居るけれども此の理は決して原則第二條を無視するものではない。

何となれば他の四官の變化は境遇に伴ふて、喜怒哀樂を明々白地に表はすも、超然たる耳

は此の自由意志に添はさるが故に、心性の表彰とは無關心であるが形態比例には必らず一致する、但し特種として彼の力士の耳の如きは自ら別であることは云ふまでもない。

而して耳の輪廓に不鮮明なるは幼にして既に困苦の運命を荷ひ、母胎に在りて父母の災厄に遭遇せば、時々耳朶を缺いて生るゝことがある、吾人は電車や瓦車等衆人密集の場所に於いて種々變異ある耳朶を發見するが、其の中に時として耳朶の動く者を見受けることがあらう、かゝる者は動物的遺傳であつて甚だ面白くない、それは彼の有尾人種と相俟つて今に悲しき祖先の、形態を止むるもので淺猿しい姿である。

耳の上輪尖る者は殺伐性を帶びて無情酷薄である、中輪凸起したるは侵畧的で勇氣がある軍人か、海外發展に志して成果がある、下輪豐かに其の垂珠に豆を供へ得るが如きは、俗に福耳として金德旺盛を極むる幸運がある、耳輪大なる者は心性も豪宕濶達、耳輪小なるは意志脆弱、若し耳の色澤紅黃色を呈して美はしきは、心性運命共に佳麗なるも、汚濁暗曚なるは心毒性惡にして、運命も亦甚た不可なるを認めねばならぬ。

總じて耳は大ならず小ならず、軟かならず硬からず、筋ばらず薄からず、程よく形質を備へて色彩光澤あるを可とするものである。

而して耳の位置は鼻梁と並列する間隔に在るを喜ぶ者で、詳しく說けば眉間を横ぎる直線と平行する鼻下の直線との間則ち顏面中部に存在するを可とするものである、其の耳孔の位置は側面に於いて三分の一の後方分界線に懸るを正當とする、

若し此の線より前方に進むは動物性に强く、其の後方に移るに從て智力に優ることゝなるのである。而して此の耳孔の大小形狀も頗る心性と運命にも影響するもので、其の大なるは行動粗野に流れて時に犯行を敢てし、其の小に失するは貧苦困難にして暗愚である、されば耳孔は形態に伴ふて調和し、表はれず滅せず正然たるを取らねばならぬ。

以上一言にして盡せは耳は端嚴正肅なるを貴とするものである、彼の破れて寒きか如く、崩れて醜きは凡て不幸短命に終ることゝなる、耳が原則及び左右面の關係に於いて、左を父系とし右を母系と見るは云ふまでもなく、之れを遺傳に徵して又甚た耳の重要をも考へねはならぬ。

最後に耳の用能に就いて説くことがある、吾人の官能は眼と耳に於いて最も進歩したるもので、其の神經の如きも三萬以上に達して居る、口や鼻は其の飲食することに於いて、或は嗅くことに依つて其の用能をなすも、耳と眼は單に想像するのみで、口及び鼻の關聯を喚び起すものである。

吾人が花信を耳にして其の爛熳たる光景を展開し、馥郁たる香氣に心粹し、果ては花壇一瓢の飲に舌鼓みを打つことも出來る、されば時に聽き違ひを招いて思はぬ不覺を取るは、蓋し錯綜せる神經の正調を過まることに依るものであらう。

眼

は智識の窓である、而して又愛情の發露である、吾人の耳は聽覺に基く智識の吸收に努める時、眼は視覺に依る智識の泉であらう、吾人の口が肉的愛情として其の觸るゝことに於いて、鋭敏なる感情を有する時、吾人の眼は精神的愛情として、僞らざるものを認めねばならぬ。

されば眼は清淨潔白にして糸毫の汚濁も厭ふものである、心に曇影なきは眼に些かの惡濁もなく、黑白分明にして清々しきものがある、之れを幼兒に見て怡も瑠璃盤上の玉の露、光輝神の如く、晴氣透澄、實に老子は赤子を愛すと云はれたが、誰れが無心の小兒に接して怒る者があらう。而かも無垢白面の清淨も年古りては風にも揉まれやう、小兒も其の成長に連れて明眸漸く濁りて、昨の純潔見るよしもなく失せるのである。如何に智識のためとは謂ふものゝ餘りに痛ましき犧牲ではあるまいか。

眼は黑白分明にして黑目勝ちなるを尊しとするものである、然るに彼の四方白眼と稱し鞏(シロ)膜に勝れて虹彩(クロ)に乏し者、或は上三方白眼と云ふものや、下三方白眼の類ひは、奸惡邪智僞瞞騙詐を事とし、其の甚だしきは殺氣横溢、慘虐を敢てして涙なき鬼畜の徒である。

若しそれ車輪眼と稱し眼の縱横に廻轉するが如きは、心毒多く安靜の氣なく鼠賊の物を狙ふにも比すべきか、更に虎視耽々として他を窺ふは、油斷も隙もあつたものではない。

眼は沈着冷靜にして光輝美はしきを可とし、其烱々として人を射るか如きは英雄傑士である。

彼の動搖常なく心氣自ら定まらざるは、輕舉妄動を事とし市井に沈倫せざれは、流浪轉々漂泊の旅に困憊甚だしきことゝなる。

普通眼の運動筋は六個を備へて居る、則ち左右に動く横筋と、上下にうごく立線と、斜めにうごく斜線とがある。

横に動く者は物を探かし求めやうとするもので、彼の掏摸の徒か窃盗の類であらう。

竪にうごく者は判定識別しようとするもので、彼の司法官か之れに類する職務の眼である。而して斜めにうごく時は睡眠を催す場合であらねばならぬ。刑事巡査が街路に何事かを物色する時は、掏摸に等しく横線の働きが旺んなるが、只だ彼れの目の異るは掏摸窃盗の如く恂々たるなく、一種の權威を備へて居ることである、けれども一度び犯人を逮捕して訊問するに及びては、竪線に移りて斷定の目と變るものである。

眼には甚だ大なる目と頗る小なる目とがある、大なるは輕舉妄動、小なるは愼重審疑、彼の海岸の人々の目は多く大にして、山國の人の目は多く小なるが常である。海岸の人々は眼界廣くして淺く、輕跳浮薄に流るゝは是非もない、殊に其の交通至便なる、港に於いては、淫風吹き荒んで貞節の觀念極めて乏しきは人情の然らしむることであらう、且つ眼の大なるは時として大膽なることを敢てし、未だ肩揚げも取らぬ小女の家を離れ親を捨てゝ淫奔するが如きは世に往々見聞する事實である。

而して目の大なるは一般に淺薄なるも、博學多識と云ふことは爭はれない。

山國の人々は眼界狹くして奥く、莊重質朴にして敦厚である、親和團結の風自ら加はりて純眞崇敬の念に強い、其の着眼は一般に深刻で且つ徹底的である、彼の蚯蚓の研究に三十年間も沒頭して、博士論文を書くと云つたやうな人は、多く山國の人の目に見ることである。

之れを要するに大なる眼は華美輕噪咳博、小なる眼は莊嚴愼重深刻と見て差し閊えない、若し海岸の眼を社會主義とせば、山國の眼は帝國主義か。

眼の大なる者は交際も廣く、言語も巧妙であるが。其の約することも早く、反くことも早い、言葉多くして品鮮なく、喜怒哀樂時に臨んで激しく、憎惡好歡又甚たしく表裡がある。

眼の小なる者は交際も狹く、言語澁難で狐疑踆巡する、爲めに信ずべきをも排して不利を

招き、言葉尠きが故に意志通せず、喜愁哀樂默々として、時に勃發すれば甚だしきものがある。

眼の大なるは肉感的衝動的で、目の小なるは精神的理智的である、吾人は目の大にして淺薄なるよりも、小にして深刻なるを可とし、大にして本能的なるよりも、小にして理智的なるを多とするも、共に一利一害は免れない、則ち大は博愛衆に及ぼし清濁併せ飲む雅量あるも、小は自我固陋にして偏倚自ら同情に缺くものがある。

吾人は近視眼鏡に半可通を裝ふハイカラ黨の浮華なるを憐むと共に、老眼者流の狡獪度し難きをも憎まねばならぬ。

若し夫れ鼻眼鏡の衒氣に得々たる自尊の輩に至りては、醜惡無類吾人又何をか云はん、彼の一國の大政治家を以て自任する、和製ルーズベルトの稚氣か、衒氣か輕業の綱より太い紐をブラ下げて、眉間に漂ふ危惧の念は見るからにお氣の毒だ、果然、雲の浮き橋踏み外して彼れか藝當の常に縮尻るは、鼻眼鏡の墜落を氣にすることに若干因するものではなからうか。

目常に潤みて涙を含むが如きは多情を表はするもので、若し横線の烈しく動くは淫婦にあらされば姦婦である、目動きて轉々するは心に落ち着きなく、附和雷同するものか輕舉妄動を事とするものである。

目坐はりて沈むか如きは陰氣内に漲りて、哀心獨り悲しむか絶望の相である、若し光輝艶褪して朦朧たるは自ら死を招くことゝなる。

目の左右著しく不同なるは性情自ら乱れて、心に両端を抱き、思ひ両兎を望む者である。且つ之れを其の両親の遺傳に徴して、左右不同なるは太陰太陽の和を缺きて、其の血統血族等に必らず不快なるものがある。目は智識の窓なるが故に其の色澤は最も雄辯に賢愚を談るもので、暗黑は感情に烈しく、喜愁哀樂凡て衝動的である、茶褐色なるは才氣縱横輕快の質甚だ愉快なるも輕浮である、若し灰白色なるは自我貪慾にして奸邪の念が強い。

目は正視するを以て心の正しきを認め、其の斜視、偏視、低視等は凡て異端の者である、況んや目に疾患を有して、奚んぞ心に正しきを保たれやう。

吾人は碩儒塙保己一の故事に鑑みて、思ひ半に過ぐるものがある、彼れ一夜講莚に際して

偶々燈火の風に消されたので、其の門弟達は頗る困じて暫しの猶豫を求めた、其の時彼れは冷かに、さて〳〵眼明きは不自由なものよ、と嘲り笑ふたのであつた。

何たる傲岸無禮な言辞であらう、此の時彼れが徐ろに同情の念を以て、火が消えたかそれは困るだらう靜かにおつけなさい、と温和に答へてこそ一代の碩儒として其の德も揚るわけだ、然るを盲目の身を以て己れの終身不自由をも知らで、やれ〳〵眼明きは不自由、とは抑も何たる非禮であらう、之れ則ち額面には一点糸毫の瘢痕黑子をも許さゞる原則に該當するもので、且つ最も重要なる目晴の失明に因するものである。

塙保巳一の碩學にして猶ほ然りとせば、吾人凡庸の身は修養自戒大に愼まねばならぬ。

目は又一家眷族を檢するに毫末も僞らぬものである、目の美はしきは家庭も美はしく、目の濁りたるは家庭も溷濁である。

目は耳と並びて高等官能なるが故に、其の神經に於いても三萬を超過するものがある、吾は單に見ることのみに依つて、聽覺嗅覺味覺等をし喚び起すことが出來るのである。

吾人名畫に接して其の山水の美を感する時、それに伴ふ人情風俗の凡てを連想し、玉川の鮎の美味なるに舌皷を鳴らし、龜井戸の臥龍梅に唾液自ら生ずるを覺え、さては花莚絃聲を誘ふて美吟朗々の感に堪へぬものがある。

之れ實に眼の官能が高等にして而かも複雜なる所以で、其の時に幽靈と見たは僻目か枯れ尾花の眩覺を招く基である。

さもあれ壺坂の澤市とお里の情趣掬すべきを思へば、吾人は轉々眼あきの放埒無明よりも盲目の義理人情を辨まへたるを誇らねばならぬ。

鼻、

は原始的に考へて强硬、排除、自我、奮鬪を意味して居る、原生動物が其の水中に進むに當り、鼻は差し向き進路の中心機能であらう、只だ水中に於いては嗅覺の要なきが故に、鼻は啻に排除進擊の器具に過ぎなかつたのである。

然るに陸地を匍匐するに及びて次第に嗅覺を惹き、遂に自衛防禦の一端に資することゝなつたが、人類が歩行を立体に取ると同時に、地上の低きを嗅くことに遠ざかり、其の嗅覺も頗る鈍きを致したのである。

鼻は其の用能に於いては呼吸に伴ふ嗅覺であるが、人類の第四層期後に移りては、人格の

儀表として威容を整へることゝなつた。

鼻は構造に於いて軟骨と筋肉より成り、內部は數多の纖毛と粘膜によつて螺旋狀をなして居る、之れは呼吸に際し空氣を毛を以て漉過し、其の微塵物を更に粘膜に附着せしめ、且つ寒冷なる外氣を直接肺に送らさるやう、累旋を迂回せしむる自然の妙工に外ならぬのである。

されば鼻は其の嗅覺に於いては動物より劣ると雖も、人間性の表儀として肉体的にも精神的にも、甚だ優美高尙なるは本能を離脫して理性に來た所以である、故に鼻は人生の花として麗はしきを望まねばならぬ。

吾人は彼の賤業婦にして實に麗はしき鼻の持ち主を見ることがある、けれどもそれは路傍に咲き誇る菫、蒲公英の色麗はしきに過ぎざれは、道行く兒童に摘み取られ、時に馬蹄の蹂躙に虐けらるゝことゝもならう。

之れを幽谷凛として咲き匂ふ梅花の氣品に比べて、或は朝日に輝く山櫻の氣骨稜々たるに鑑みて、吾人の鼻は麗はしくして氣品を備へねばならぬ。

凡て筋骨は勇氣の表彰とも云ふべきである、故に鼻は勇氣を示して居る、其の高くして隆起するは羅馬鼻（ローマンノース）と稱し、武勇侵畧果斷自尊等を意味して居る、彼の西洋人の鼻が著しく隆起するものは、希臘羅馬の昔より今に至るまで、侵畧侵畧又侵害で干戈休まるなく、彼等は常に鬪爭を事とした結果であらう、之れを我が國人の低きに見て鎖國攘夷の掟を守り、進畧的に甚だ缺ぎたる証左である、更に彼の深窓紅閨の佳人にして鼻の花々しからぬは、出鼻を敲かれたことに依らねばならぬ。

此の意味に於いて鼻の高き婦人を後家相と云ふは、蓋し勇氣に勝ちて他を壓し、時に亭主をも尻に敷くからであらう、最も我が觀相學を體得して自戒甚だ愼む者は、高きを以て猶ほ且つ温和柔順なるも、時あつて天性の傲慢强硬が穗に表はれることは是非もない。

鼻高きも瘦せたるは薄倖にして終生富に潤ふことは出來ぬが、氣骨を持して隱士の如きを以てせば高潔の氣自ら他を敬服せしむるものがある。

現代の人格者杉浦重剛先生の如きは、正しく此の瘦軀鶴の如き氣品を體現せられたもの、其の鼻の隆々として高く且つ尊きを仰かねばならぬ、吾人は本書の卷頭に先生の題字を飾

る筈なりしも、天何の無情ぞ本稿を草しつゝある時、先生の訃報に接したのである、痛悼曷んぞ堪へんや、謹んで英靈に對し、高風永く吾人を感化せられんことを祈るものである。

若し希臘(ギリシヤン)鼻に至りては優美高尚、神氣到りて自ら一藝能に秀づるも、憾むらくは物質的に乏しきを如何にせん、世俗に、色男金と力はなかりけり、困つたことでる。

之れを要するに隆々として高く聳ゆるは尊大、肥えたるは我慾、低きは卑野、而して各自其の分を超ゆるは共に陋醜の觀がある。

若し準頭下に垂れて鷹の嘴の如きは、個性險惡自我を事として他を顧みない、更に又段鼻と稱して鼻梁に段々あるは、人情の美を缺きて而かも終生困苦を免れない。

鼻に紋理縱横にして班点汚濁あるは短命にあらざれば子女に緣なく、然らざれは貧苦敗亡の非運に泣かねばならぬ。

若し夫れ吾人の鼻梁を失ふ者は、既にして人類としての價値をも失ふ者である、彼の惡性の病毒に依りて準頭を脫落したる者が、マスクに隱蔽して世を我れと自ら阻むは、實に人生の一大痛恨とも謂ふべきか。

近時社會の風潮が漸く形式的慾求より離れて、實質的慾望に赴いた結果、位階勳章等の觀念に薄らぎ、金錢財貨に重きを致し、官界の倣泳に飽きて、民間の企業に囑望し、世を擧りて利殖に奔命することゝなつた。

而して其の努力奮鬪貯積等の凡ては意力の表現たる鼻に懸りて、鼻は實に吾人の銀行會社金庫融通の機關を成して居る、而して鼻孔は其の機關の强弱優劣を示すもので、大なるは出納頻繁にして時に大金を得るも、從つて又大なる支出を見ることゝなる、其の小なるは意志も脆弱にして警戒秘密に强く且つ甚だ卑吝に傾くものがある。

若し鼻孔不同にして大小あらは思想混乱を極め、住所職業に移動多く漂泊羈旅に失脚する者が多い、鼻孔も身形比例の原則に依つて、其の鼻の形狀大小に添ふは論なきことである。

鼻の神經は學者に於いて諸說あるも、先づ十四五種と見るべきか、則ち花卉、植物、魚族獸類、藥品等を區別したものである、かゝる神經は肉的なるが故に高等官能の眼や耳と異り、其の數も鮮く且つ決して錯覺を來すものではない、現に芳香掬すべき梅林を逍遙して誰か不快な感を抱くものがあらう、又醜惡なる臟腑の腐臭に接して何人か快感を覺えやう

而して此の嗅覺は味覺及び觸覺に基いて、其の美醜好惡を異にする場合がある、之吾人の嗅覺が次第に薄らぎて本能に遠さかる所以であるまいか。

原始的に於いては性慾に對應する嗅覺も、衣服を纏ふことに於いて局部を隱蔽し、其の發散は漸次に退化して今や纔に腋下に見ると雖も、局部の嗅氣と相俟つて一般に嫌惡せらるゝことゝなつた、然かも今に於いて婦人が化粧に香はしき匂ひを用ゐるは、性慾挑發の原始的遺傳と云はねばならぬ。

而して其の嗜好の推移は食物に在りては、酒を好むに因して彼の醜惡なる烏賊の黑づくり松魚の鹽から、海鼠のこのわたの如をも貪り、性に基きては渡米中に自然と腋香の米國婦人を愛することゝなり、モルガンは五万金を投じてお雪夫人を寵愛した、しかも來朝當時は日本婦人の髮の臭氣を痛く忌み厭ふた筈であつた、かく性と食とは吾人の嗜好を種々なる方面に導くが故に、嗅覺は決して吾人に常に一樣なる感覺を與ふるものでない、況んや最高等なる人種に至りては嗅覺は殆と其の要を認めぬことゝならうか、ソロモンの榮華に觀樂の限りを盡す成金者流は、蘭房蘭奢、伽羅の枕に現つをぬかす色魔もあるが、吾人の理性に活きる者はソロモンの痴を眞似る筈もなく、鼻は啻に呼吸に適して可なるわけである。

されば鼻孔仰ぐは動物性にして、隣家の割烹に小鼻を動かし、鰻屋の前で足を止める輩であらう。

鼻は人生の花にして又一面人生の幹である、吾人の花は麗はしく、吾人の幹は直くなるを尊ばねばならぬ、鼻の缺けたるは花に疵あり、鼻の歪みたるは根性に歪みがある、鼻は端嚴美麗尊貴であらねばならぬ。

吾人の鼻は忘れても歪んでならぬ、繰り返して謂ふ、鼻は人生の花である、花の徒らに艶なるは仇が多い、麗はしく氣品を備へて初めて成果あるも、其の根幹弱きは悲哀である、世に美人薄命はそれ之れに因するものではなからうか。

口、

吾人の官能に於いて口は最も野卑低級なものであつて、而かも亦甚た尊貴なものである、吾人は他の凡ての官能を失ふも、口だに餘さば吾人の生活は不自由ながらも存續を承認されるものである。

口を原始的に辨まへては頗る醜惡なものとなる、之れを原腸胚のそれに比べて口が下等動物に於いては、單なる運動用具に過ぎざるも、彼等が前進することに於いて、其の有害と有利とに論なく之を享受せねばならぬ、多くの障礙は鼻頭に依つて排除し、其の稍や柔軟なるは清濁併せ呑んだものである、而して口よ享受したる物質は、其の嚢胚に藏し、更に取捨して排泄に努めねばならぬ、之れやがて胃腸排泄等の機關を完成したものであらう。故に吾人の口も原始的には甚だ醜なるもので、營養攝取の門戸に過きないものであつたが耳の警戒を其の運動に求めさる頃より、著しく進化して遂に今日の形態用能を表はしたものである。

然かも口か今に飲食と交渉を有する以上は、口本來の使命は何と云ふても肉慾的であらねばならぬ。

眼に映する愛戀が精神の閃めきとして、行き交ふ路上の一瞥にも猶ほ温たかき情趣を覺えるが、口の愛情は接觸に依らされは感知することは出來ない。

小説ほとゝぎすの浪子と武夫は反對列車の窓の中より、殺那の感激を其の愛に溢るゝ眼と

眼で知らせた、お染と久松は藏の窓越しに眼と眼で交はし、深雪と蕃山先生は危機一髪の舟の窓、かくて眼の戀愛は徹頭徹尾プラトニックラブであるが、口に至りては舐めたり、吸ふたり、喰ひついたり、徹頭徹尾肉感的である。

日本人の高尚な上品な戀愛に比して、西洋人のキッスは將に頗る露骨であるが、宇治の螢狩りで一目見て戀風に誘はれる所謂深窓の女性も、いざ鎌倉となれば家を飛び出して、都路から東の空、果ては眼も泣き潰して、切角會ひは逢ひなから物のあやめも判らぬ始末、それを耳の官能が聞き知つて、若しやと思ふ煩ふも甚だ妙であらう。

然らば口は若干肉的を離れた殊勳を備へて居ると云はねばならぬ、何となれば吾人の言語は何ものにも優りて、他の感情をそゝることである、世に能く口前に惚れたとか、お世辞者とか稱して、言葉に感心する場合が多い、況んや之れを美聲に聽いて、呂昇淨瑠璃は武骨一片の鬚髯男子を泣かし、淫婦のお蝶夫人に赤髯が夢中になり、見もせぬ隣家の常盤津に憧れて、用もないのに訪問するは、凡て聲色の美に迷ふものではなからうか。

鳥類にも猶ほ聲音に異性を呼ぶ力がある、ましてや言語の靈智に誇る吾人が、此の言語美

にチャウムされるは當然であらう。

若し眼の戀愛を口の肉感に受けて、更に、あなたは妾の命よ、などゝ耳に聽いては石部金吉佛も踊り出すことは請け合ひである。

しかし思はねばならぬ、若し此の場合に英語を解せざる對者に、アイ、ラブ、ユー、と云ふた所で何の感じもあるまい、然らは言葉は意志を疏通せしむる最も重寶なものである。

以上の意味に於いて口は性慾の發露を遺憾なく物語ると共に、品性の美醜を示し、度量襟懷、秩序飲食等の一切を表示するものである。

されば口の麗はしきは品性麗はしく、口の醜なるは其の品性も亦下劣なるを免れない、口大なるは大量大膽なるも、其の締りなきは心に散漫なものがある、男子にして女子の如く口唇小なるは、意志薄弱にして一事一業をなす力はない。

口の形狀は仰舟口と稱して、舟の水面に浮ふが如きを可とするも、其の甚たしくして新月の反りたるが如きは宜しくない、若し舟の覆りたる如く、俗にへの字なりと云ふは剛腹の士にして、其の教養の如何によりては善惡甚だしく懸隔あるものである。

口は眞實に於いて四字形なるが最も正しい、口角締りあるを以て凡てに秩序を正すものとする、而して下唇は上唇より稍や廣く厚きを佳とせねばならぬ。

口唇厚くして夜具の襟の如く、然かも色澤爛として血に燃え、無數の竪皺ある者は情慾に節制なく、誘はゞ將に應ぜん風情がある、總じて口唇の竪皺は愛情に深きを示すもので、之れを愛嬌、歡待の表徴と云ふて居る。

口唇薄く麗はしきは心性質である、前者の愛情が末稍的肉感的とすれば、之れは中樞的精神的であらう、前者は肉的衝動に依つて性慾の達成を見るも、後者は感情の刺戟を覺えて然る後に肉に及ぶものである。則ち前者は生殖的であつて、後者は接觸的と斷すべきである、之れを母型と娼婦型に考へて自ら釋然たるものがあらう。

而して彼の仰舟口の甚だしきと覆舟口と、四字形の嚴なるに到つては筋骨表彰で勇氣剛膽である。

口は愛情の發露なるが故に夫婦間の交情は、其の口唇を一見して直ちに判別することが出來る、口唇美にして堅く結びたるは伉儷睦ましく、琴瑟相和するものがある、それに反し

て口唇醜にして締りなきは、夫婦相反きて嫉視隙々たるを免れない。

若し口唇の色澤丹花の美なるは心性高潔、志想優雅にして一藝に秀づるも、醜惡暗褪にして遂に心事の陋劣を暴露し、品性に飲食に凡て之れ獸的ならざるなきを示すものである。

口は飲食の具なるか故に吾人の攝取に基く利害關係は、最も詳細に且つ迅速に口唇に表はすことゝなる、故に吾人が毒物を漫然飲食するや、口唇は直ちに色を變えて、其の急を告ぐるものである、かの猫いらずの如きを服したる時は、其の口唇の色を失ふて危急を刻々に告ぐるは、事實に徴して何人も首肯されやう。

若し口唇紫黑の暗晦にして其の厚きに失するは、淫蕩の氣既に全身に漲りて倫落の情性、盲より盲に入つたものと云ふべきか、更に毒惡見るに堪へざるは乱淫度なくして、鼻將に人生の枝頭を去らんとする類ひでる。

口の神經に至りては他の官能に比して僅かに、辛酸苦甘の四種よりないのである、近時學者の説として他に鑛物に基く二種類を加味したるも、未だ確然たる實証を掴んだ譯ではない、而して此の辛酸苦甘とても口唇の外部に於いて檢するものではなく、口腔内の舌と粘

膜の若干部分に於いてのみ味ふものである。

されば味覺を以て口唇に論ずるは聊か附會の説であるが、茲に口唇と相俟つて然かも口唇に最も重大なる關係を有する、

齒牙、

に就いて一言を費やさねばならぬ、くちびる落ちて齒寒し、吾人の齒と唇とは既にして唇齒の關係と稱し、二者の分立は何の場合にも許されぬのである。

くちびるが外部に表はれて清く麗はしく、其の心性運命遺傳を物語る時に、齒牙は内部に藏れてよくその心性を淘治し、運命を保持し、遺傳を正順ならしむるものである、故に齒は内に愼みて温健に清く正しきを尊ばねはならぬ。彼の齒列粗雜にして乱杭の如き、或は間隙を生じ或は重疊なる凡てこれ非なるものである。

齒の鋭きは性質獰猛にして肉食を好み、齒の扁平なるは性質温和にして菜食を嗜むは、他動物に徴しても自ら鑑定されやう、則ち齒の鋭きは動物性にして然かも筋骨的猛獸に類し歡骨頑强に顳顬部は膨大し、たとひ人間性に戒飭するとも何等かの折に爆破するものである。

齒の扁平は穀物を粹くに適したもので、前者の肉を裂くと趣きを異にし頗る温和なるは、羊や野羊や鹿に徴して見ることであるが、人間は幸か不幸か齒に平扁なるも猶ほ牙に聊か鋭きを備へて居る。

人間本來の食物はトルストイの菜食論に聽かずとも、肉食は決して其の質に添ものではない、然るに大食に伴ふ必然の慾求は調味料を交へて、遂に肉をも攝取するに適する樣に工夫した、その結果肉を裂かさるまでも之れを植物の纖維質と共に咀嚼することゝなつた、かくて諸種の發明及其の料理法に試みられて、今や悲しい事には金爛の袈裟衣に善男善女を隨喜せしむる、活き佛も血の滴るビフステーキを喰へば、嬋妍花の美婦人も生々しい牛の屍体を眞正面に見なから、牛屋の店に晩餐のお仕込みをなさる有樣である。

されば吾人の齒牙は現在に於いては菜食七分に肉食三分の割合であらうか、其の鋭き者ほど肉を好み、扁平なるは菜食黨と見るべきである。

くちびるに於て外部の狀態を檢し、齒牙に內情を探るは最も巧妙なる觀察法である、門齒は自己を表はすが故に其の美醜は直接の美醜に關係することゝなる、門齒破れたるは自ら身を破り、門齒缺きたるは自ら其の身を毀つことゝなる、若し門戸開きて其の身を守るなきは、彼の口唇開きて貞操に開放的なるが如きか、更に門齒歪みて或は錯雜なるは、妻を重ね夫を重ね不義非道にして、しかも自ら悟らさる獸性でる。

犬齒は鋭きを常とす其の身を守るに眷族朋黨の如きか、若し犬齒に乱れあれは血族朋黨に賴る邊なく、其の身孤單寂莫である、其の臼齒、大臼齒等皆之れに準じて正整規矩を備へねばならぬ、而して上齒は宿命を判じ、下齒は努力自發を辨まへて差し閊えなきものである。

口が人生の根として、生殖の原動力として、品性の表儼として、强く堅く深く麗はしくあらねばならぬ、と同時に齒は其の內面的に之れを保佐するが故に、之れ又强く堅く深く麗はしくあらねばならぬ。

齒を人生の樹に於ける葉として、其の落つべき時に落つるを可とし、老いて齒牙の健實なるは彼の松杉の質に比して、雪霜の苦を嘗むるが如く譬へたるは、聊か牽强の說に似たるも現時の社會狀態に在りては、蓋し又一面の眞理とも思はねばならぬ、何となれば後來何

等の慰藉的機關の設備もなき社會に於いて、齒牙の頑健なるは老人と雖も其の安逸を許されない、若し貧にしては其の勞働を餘儀なくし、富めるは子女に苦惱を覺えて悲愁深きを致すか、或は貴くして猶な老人の怜れは現時に於ける、我か老人陳列會とも云ふべき樞密院に見るも首肯されやう、更に之れを雪月花旅行の園公に見て、其の愚其の痴、其の健、吾人の常識に於いて及ふべくもない。

更に況んや元老なるもの、朽木彫るべからさるを以て、廟堂に蟠踞し蔚然一國の勢力をなすは身の程も辨まへさる痴漢にも劣りたる根性と云はねばならぬ、彼等齒牙の頑健にして國家の前途を阻み、青年の勇氣を阻止する者、吾人は其の因を齒牙に求めて悚然たらさるを得ない。

眉、

吾人は五官の最後に眉を說くことを以て、哀心愉快に堪へぬものがある、眉は原始的に考へて遂に求むることが出來ない、眉骨弓上の一畫は實に人間性に活きるイボックで、威容堂々禮義三千、吾人は眉あることに依つて靈長の誇を感ずるものである。アリストートルは人類は社交的の動物である、と謂ふたが眉は社交の表徵であつて、又實に趣味美感の顯象と云はねばならぬ。

眉の用能としては肉体的に何等の効果も齎らさぬのである、眉骨の保護と眼を擁護することに、纔かに其の要を認むるも、そは極めて單なる働きであつて到底精神的觸覺感能に比ふべくもない。

吾人が幼兒の頃に在つては眉毛甚だ疎薄にして、其のありやなしやを疑はれるものさいあるが、次第に成人するに連れて濃厚となるは、之れ正しく社交に因する容儀の整調と、趣味の向上に伴ふ思想の反映に外ならぬのである。

眼の如きは幼時清淨無垢であるが、成人に連れて次第に汚濁となるも、眉のみは幼時未だ趣味に乏しく社交性に缺くが故に、其の狀態は全々動物と異るなきは是非もなからう。

されば眉は一身の儀表であつて、人間性の表徵である、眉麗はしきは倫道節義を正し、趣味美感に優雅なるを認めねばならぬ、若し之れに反して眉疎惡にして乱れたるは、禮讓非道にして趣味に乏しく、人間として遂に價値なきものである、故に眉は人間性と動物性とのバロメーターとも云ふべきであらう。

眉は人類進化の徑路に索めて五層期の頃に由來する者である、吾人が未だ野生期に在つて衣服を纏ふことなく、全身悉く毛を以て蔽はれたる時代は眉の存在を知る由もなく、從つて其の顏面とても猴の如く醜なるものであつた。

然るに五層期に移つて美感趣味を辨まへると共に、性に基く羞恥は容貌の整形に努め、先づ顏面を端麗ならしめたものであらう。

往時婦人の人格を認めざりし時代に於いては、其の嫁するに際し眉を剃り落したものである、その理由は夫人たる身分を明々白々に告知すると共に、一には喜怒哀樂の感情を面に表はさるに依つたものであるが、其の人格を無視したことは決して否定されない、此の陋習が今に傳はりて眉を落したる婦人を路上に見受けるが、公平なるべき法律に於いてさい男女の權利に差別を設けられた時代の錯誤とも云ふべきか。

然るを近時新らしき女の一派が隨所に蔓りて、男子に對抗しつゝも其の薄き眉を色彩し、黛に浮き身を窶す至りては、滑稽とも笑止とも氣の毒千萬に存する、之は宂勝ち人形の家のノラに目覺た譯でもあるまいが、兎も角もまゆに人間の表顯を自覺したことは爭はれない。

かゝる貴重なる人間性の儀表たるべき眉は、男子に在りては一文字形なるを威嚴に尊ばれ、柳葉形なるを趣味に喜はれて居る、女子にありては新月眉の匂ひ床しきを最とし、共に濃厚に過きず、疎薄に失せさるを可とするものである。

若し劍眉と稱し眉端劍の如く上に跳ねたるは、男子に在つては權威自ら備はるも、剛快奔放、敎養に乏しき者は劍難を免れず、女子にして如斯はたとひ身分あるも夫に反き、姦通非義の罪科を犯すものである、彼の間斷眉と稱しまゆに斷絶あるは、兄弟に離反し趣味に矛盾を抱き、交際に甚た圓滑を缺くものがある。

まゆ頭上に向ひて八文字の如きは未だ可なりと雖も、若し眉端天に沖するは、成書に龍頭虎尾と稱し甚だ常人に不可なるものである、而して彼の箒眉と謂ふは眉尾に薄く乱れて散在するもの、兄弟朋友遂に其の終りを全ふすることは出來ない、則ち始めに良く終りに乱るゝものである。

まゆは定則として眼より高きこと七分、其の両眉の間隔は各自の拇指を挿入して、若干の餘

裕を要するものである、而して眼よりも稍や長きを可とするも、凡て其の度を逸したるは又甚だ凶相と見ねばならぬ。

まゆの眼に迫りて壓するが如きは心毒多く陰險である、高きに失するは超然として時流に沿ざる隱士か愚者か、両眉迫りて相摩するが如きは、愁苦其の身を去らず、貧困にあらざれは短命である、其の甚だ開くは暗愚か低能か將た大聖か。まゆ眼より長きは兄弟五人以上を算し、其の短きは五人以下なり、若し眉に厚薄あれは取捨して、兄弟存亡の數を見るべく、其の甚だ長きに失して濃き者は却つて兄弟に縁なし、吾人は新月眉の麗はしき質に賣笑婦を見て、觀相の愈よ嚴なるに襟を正すものである。

彼の女に親なく肉縁なし、而かも優艶佳麗を極むるは之れ其の度を失して、遂に媚を呈したる結果に依らねばならぬ、されば眉は媚にして其の餘りに過分なるは、媚を呈して身を立つることゝもならう。

黛に努力する新らしき女よ、御身達が男を呪ひつゝも其の粉飾は抑も何を意味することか、新女の巨頭某子は學生時代に某文學士と伊香保に雲隱の藝當を演じ、其の醜を禪學に蔽ふて自他を僞り、更に年少の某と同棲するや、世は若き燕の俠艶を嘲笑した、其の時彼の女は母に告ぐるに、妾は決して子供を生むことはないから御安心あれ、と何ぞ計らんや後ち幾何もなく燕の卵が蜉化しやうとは。

かゝる僞面の新女が男子を向ふに廻して、婦人問題を振り翳した所が茶氣滿々、未だ舞台の立ち廻りもせぬうちに、先づ其の苦心の黛から剝けねば幸である。

講話に飛んだ新女の怨みを纏ふたが、まゆは人生の樹の枝葉である、其の繁きは却つて他を害することはダーヴキンの自然淘汰にも首肯されやう、さりとて乏しきは秋風落魄の感に堪へぬ。

若しそれ、まゆの全々なきは枯木寒嚴、人生の花もなく果もなく、孤影瑩然として痛恨限りなきものがあらう。

之れを要するにまゆは眼よりも程よく長く、両眉の間に定規を正して迫まらす、壓せす、瘢痕黑子濃薄なく毛質柔順なるを可とするものである、彼の鬼眉と稱してまゆの錯綜反逆なるが如きは、嚴に正して整形美容に努めねばならぬ。

以上五官の概畧を說き來りて甚だ其の至らざるを憾むものであるが、限りある紙數に限りもなき五官の妙趣を說くことは到底不可能である。

要するに吾人は耳の天命を與へられたる種子とも思ひ、之れを其の質に鑑みて、先づ口の根に培ひ、鼻め幹に正し、眉の枝葉に其の分を辨まへ、鼻の麗はしく咲き、眼の清きに實らねばならぬ。

然るを口の根に營養を取捨せざれば、齒の葉を損し、幹を傷め、枝を枯らして花を失ひ果を亡ほすことゝもならう、まゆは外部に在りて枝の繁りに他を災ひするなく、其の葉の攝取に貪るなきを愼み、齒は根毛の攝受、若きに聊か無理をなすも後日の災害あるを、まして老來其の强固に慢じて若者に伍する、やがて不覺を招く所以である。

吾人は人間性の自覺に依つて、五官の本能を智能に導きたることを深く紀念し、零寐猶ほ止まざる五臟の努力に習ふて、常に向上發達に努めねばならぬ、之れ吾人の魂の永久に活くる所以であつて、且つ人間性の神にまで到達し得る可能性を發揮することゝもならふ。

故に吾人の信條は。

耳の天命に鑑みて、四官の努力に人事の限りを盡すことである。彼の人事を竭して天命を俟つ、と謂ふは吾人甚だ慊焉たらざるものが、天命を辨まへすして人事を竭すは冒險的である、吾人は天命に考へて人事を盡すが故に、順序正しく道に處して過まりなきを確保されるのである。

最後に卑近なる說ではあるが訓戒として傾聽に値ひする故傳がある、それを以つて五官を終ることゝする。

耳は聽くべく出來て居る、故に耳正しきは正しきを聽き、耳卑しきは卑しきを好む、他も凡て之れに類して眼の清きは清きを視、不淨なるは不淨を視、鼻の惡しきは惡臭に傾き口の醜なるは惡食を嗜む、若し齒牙乱れたるは惡言を事とするものである。

まゆも此の理に依て麗はしきは兄弟朋友社交趣味にも麗はしく、醜なるは其の凡てに醜なるや云ふまでもなきことである。

吾人の觀相は五官を以て能事足れりとするものではない、更に顏面部位に屬して二十乃至四十三個に區分し、皆夫れ夫れに運命性格を考査することが出來るのである、例へば。

髮際を以て遺傳を檢し、額の中心を以て官祿を窺ひ、眉間に希望の成否を辨じ、眼と眼の間に疾厄の有無を調べ、鼻に財產を觀取し、人中と稱する鼻下より上唇に到る溝に子女を求め、頤に家宅を探るなと詳細に檢して、更に額部の左右に父母を見舞ひ、目の周圍に家庭を訪ふて妻女の關係子孫の健否を斷じ、鼻翼に時運の衰盛を考へて、それより兩頰に下走する法令線に職業の適否を調べ、耳前に災禍の有無を辨まへる時、吾人は逆運は轉換して幸運となし、盛氣愈よ增大ならしめて、人事何事か望月の缺けたることもなき、圓滿佳良に一身一家を保持し、出でゝは天下忠良の民となりて、光輝ある大和民族性を發燦することが出來るのである。

吾人は天下國家に貢獻するに當り先づ其の家を齊へねはならぬ、家を齊へるには先つ其の耳を正さねばならぬ、其の不正にして何事か家政に資すことが出來やう、其の家乱れて如何ぞ國家に盡し得やう。

吾人は自らを正すことに於て根元義であることを思はねばならぬ。

デルフォイの神殿高く千古輝く敎訓は、

『汝を知れ』

とある、嗚呼、吾人は如何にして我れ自らを知るべきか、之れを鏡面に寫し見るも、照子無心にして何事も我れに語らぬのである、只だ映つるところのものは憂愁悲痛の容貌のみ。見よ醜なる口、歪める鼻、濁りたる眼、乱れたる眉、皺襞永へに苦惱の波を湛へて、盡きぬ恨みは綿々として漂ふて居る。

然かも默々多時、吾人は吾人の已惚れより去つて暫し慚愧に我れを省みる時、殺那の恐怖は戰慄となつて、過去の罪科は歷として鏡面に現はれるのである、かゝる時何者の傲岸を以てするも、省みて我れに寸毫の過失なしと云ひ得ることか。

吾人は懺愧の涙に我れを悲しみ恨むて、死も亦厭はざらんには、そこに一縷の光明燦とし

て、吾人の前途を照すことゝなる。

かくて自己を大磐石の重きに据えて、眞個の我れに返る時、純良無垢、噫、吾人は初めて我眞を認め得たる喜びに感激するであらう。

眞純無垢の我れに於いて、今將に何の畏れかあらう、聽け、省みて疾しからずんば百萬と雖も我れ往かん、と吾人の勇猛心は一大發奮をなして、爰に搖ぎなき大格を造ることゝなる。

彼の顧みて過去の觀樂に泣き、既往の失敗に悲しむは吾人の斷じて與みするものではない。吾人の勇者は須らく既往に鑑みて、今日の努力を明日の光明へと導かねばならぬ。

それには希望に活くることが肝要である、正しき希望明なる希望、之れ實に人生透了の一貫である。

我が觀相學は此の希望に添ふて、健康を保ち、修養を加へ、運命の循環する所、自智啓發を致して、結婚に、職業に、家庭に、朋友に、趣味に、智識に、善導することを怠らぬ者である。

若しそれ、自らを知つて更に他を知るを得ば、世に狗盜、鼠賊を翦滅して、神人一致の理想境に光榮輝々たるものがあらう。

觀相正義　終

光の前に面を正せ

博洋謹手

人間共存の意義は近時漸〻合理的に解釋せられて來たが、そは啻に經濟的協調と道義的契合に過ぎないので、眞實に人生其のものを根抵より闡明し、且つ理解するには遺憾ながら隔靴搔痒の感なきを得ない。マルクスの共產論クロポトキンの相互扶助は、研究見るべきものはあるが、產兒制恨や性的問題に至つては往くとして容れられない、夥しき哲理の書は机の花と咲き乱れて居るか、誰れかタゴールの愛を心から掬むものがあらう。

アインシユタインの相對性はニウトンの絶對性を顚覆せんとして、學界は今將に怒濤狂乱の渦を捲いて居るが、還銀の詐畧に罹つて狼狽度なき學者の手腕では、到底截然たる解決は覺束ない。

かゝる時靜かに人間性の根幹に坐して思ひを自然にめくらせば、錯如たる迷妄と斑如たる牴牾に我れにもあらで物憂きを覺ゆるのである。

澆季末法にして悟道の諦心何の所にか求められやう、人は進退に窮し物心二元の岐路に彷徨すること、實に年久しきを悲しまねばならぬ。

榮枯盛衰、死生窮達、四時の變換、日月の運行等思ひを此に致して何人か警異の感なきを得やう、眇たる五尺の一肉塊、それに伴ふ喜怒哀樂、噫、吾人は何の爲に生れ、何の所にか赴くことか、天地は悠々、人生は漠々、生きて何事をなし、死して何ものを齎らすか、五十の歲星、徒らに醉生夢死せんには吾人の生涯や餘りに儚なきものと云はねばならぬ。

實にや道を求むる者には、葉笹に映らう露の閃めきも仇には過せぬ、端てしなき深山路に踏み迷ふては樵歌も時に救ひの御法とも聽かれやう。

茫邈無限の人生に儚なき希望を抱いて、我れと自ら窘迫することは、或は愚かしき業かも知れぬ。

さもあれ潺潺一滴の雫にも洋々として盡きぬ何物かを認めねばならぬ。

宏遠の宇宙を仰ぎ、微妙なる人生を思ひ、問えと惱みを去つて、解脫の光明を自智に索めて止まされば、衷心獨り樂しきものがある。

そも我れとは何ぞ、不平を除き、歪みを矯めて、虛心坦懷、先づ我れ自らを考ふる時、天

來語あり。

「光の前に面を正せ」と

あゝ何たる清き教訓であらう、何たる尊き導義であらう、我等は先づ、光の前に耻辱を覺えぬ潔淨の心に一强勇の身を造らねばならぬ。

吾人はかうした眞摯な動機と、敬虔な感激とに依つて、拜跪默々、神を凝らして達成した至純至誠の結晶を今輯攬して其の第一編を、觀相正義と、名づけて世に出すことゝした。

則ち三年默契の成果、美ならざるも味い自ら他と異る風趣あるを敢て自負するものである。

跋文

備中玉島には無用にして又頗る必要な一奇人が居る、身は神聖な勞働に從事しつゝ、業餘天下國家を痛論して、泣いたり怒つたり笑ふたり悲しんだり、無智と思へば大變な名言を吐き、馬鹿かと思へば非常な悧怜振りを發揮する。

而して天上天下唯我獨尊の生活に綽々たる餘裕を示して、政治に、經濟に、文藝に、宗教に何でも御坐れと精勵甚だ勉めて居るが、どうやら日蓮主義の臭味がある。

それかあらぬか其の鋭鋒辛辣な雄辯は、既にして一般に認められて聲望頓みに大を致した。

人あり彼の名に憧憬して彼れを其の居に訪ふ者は、先づ其の門標を仰ぎ見て一驚を喫せざるを得ない、彼れは實に一理髮店の主人に過ぎないのである、而して其の狹溢なる店頭に掲けられたる數々の看板、曰く何々新聞玉島支局、曰く何々雜誌玉島支部、曰く勞働組合何々、曰く勞本會、曰く何と、種々雜多なる看板の陳列は、以て彼れが百科全書を體驗して、清濁併せ呑む雅量を示すと共に、其の反面に於いて苟も玉島に於いて事を成さんと欲

する者は、彼れが一顧に價ひせさるべからさるを立証するものではあるまいか。

彼れ元來が營養質の親分系、來る者を拒まざるは交はるに天下知名の學者紳士より、通りかゝりの風來坊に至るまで一視同仁、お世辞なく愛嬌なく、氣隨氣儘に奔放縱横、時に客を店頭に放置して飛ひ出し、劇場に町政批判の大獅子吼を試み、溜飲三斛、漸くにして下がれは孜々としてジャッキを運び、飽けば再び論客となつて國士の風格を表はすが常である。

此の奇人一面甚だ骨鯁頑堅なるも、愛情に脆く殊に義を見て頗る勇む質だ。

或る年の春も過きたる頃、一風來の飄として玉島に現はれて、風變りな講演をしたことが妙に奇人の感興を惹いて、爾來四ケ年間奇人の風來坊を遇すること、親の如く兄の如く切實を極めて、他の誹謗など恬として眼中に置かない、此間風來坊自ら稱して世界一品と誇る、人間學中の觀相極秘を通信に口傳に悉く奇人に讓り渡した。

教へる者も教はる者も熱誠至諄、滿三ケ年間の今日に於いては天晴れ一流の大家をなして、日本國中觀相を業とする連中で、奇人と相對して耻辱を覺えぬ者は東京の石龍子や小西君

は別として、先づタントあるまい。觀相の妙諦を體得した奇人は、從來と聊か選を異にした思想と性格を表はして、天下國家の大を說き、社會主義や、帝國主義や、やれ勞働問題よ婦人解放よと、徒らに聲のみ大にして實の伴はさる空ら騷ぎに、人氣取りの痴態を眞似るよりも寧ろ個性に目覺めて純眞無垢なる人格に活くることが肝心だと、そこは奇人の悟りも早く三年蘊蓄の一端を世に出すことゝした。

奇人姓は小幡名は利一、號して博洋と謂ふ男で御坐る、觀相正義は彼れが聖靈を感じて生んだものであらう、三年胚胎の奇人の畸形兒、珍か妙か將た凡か、親の奇人は產後の苦も打ち忘れて、無性矢鱈に親馬鹿チャンリンを發揮して居るが、取り揚げ婆の風來坊は道がに孫の肥立ちを案じて、八百萬神や佛や基督樣を拜み念じて、右や左のお旦那――、おつとつとお里が知れ孫の出世に係るぞ。（風來坊稔生）

觀相鑑定

鑑定事項

一個性檢定　二體質、保健法　三性質、修養法　四宿命觀　五適業、副業、家業
六結婚、年齢時期相性等　七家庭、親子、夫妻、兄弟姉妹、同居等　八交際、公私關係等
九運命循環律、宿命と自由意志、自智啓發
十逆運轉換法、時運、訓戒、趣味

玉島町
博洋觀相所

小野田セメント製造株式會社特約店
安藤商店
店主　安藤嘉助
岡山縣玉島町
電話一〇三番

材木商
製材業

吉山本支店

岡山縣玉島町戎町
電話一〇九番

最もスタイルの好い
理想的の
洋服は
植村式
裁縫に限る

植村洋裝部

玉島營業所　岡山縣玉島町榮町
倉敷營業所　仝　縣倉敷町旭町
既製品販賣所　仝　縣仝町濱田町

內外諸肥料
住友肥料元扱
安原商店
岡山縣玉島町榮町
電話二番

仁科內科醫院
岡山縣玉島町新町
電話一九番

仁科小兒科醫院
岡山縣玉島町南町
電話一一四番

安田銀行玉島支店

岡山縣玉島町新町
電話 二二番

第一合同銀行玉島支店

岡山縣玉島町新町
電話 五番・二五番

加島銀行玉島支店

岡山縣玉島町新町
電話 一七番

玉島商業銀行

岡山縣玉島町土手町
電話 五五番

肥料
セメント商
煉瓦

大西啓資

備中國玉島港
電話 五六番

肥料商

小林問屋店

岡山縣玉島町新町
電話 一七三番

江木齒科醫院
岡山縣玉島町新町
電話二四九番

倉敷紡績株式會社玉島工場
山田芳三郎

290
760

大正十三年四月五日印刷
大正十三年四月十日發行

版權所有

定價金壹圓貳拾錢

著作者 岡山縣淺口郡玉島町大字柏島六六六番地 小幡博洋
發行者 岡山縣淺口郡黑崎村三〇四〇番地 中藤廣次
印刷者 岡山縣淺口郡玉島町大字阿賀崎 玉島活版所
印刷所 岡山縣淺口郡玉島町大字柏島六六六番地 心理哲學研究會
發行所

販賣所
岡山縣玉島町
高田盛文堂書店
電話二三二番
振替口座大阪五一〇四四番

終